

2012年6月18日

「非核の会・京都」の25年・私論—これまでとこれから

非核の政府を求める京都の会(代表) 望田幸男

25年の到達点

去る四月、本会創立二五周年の記念集会在、多くの方々のご参加のもとに行われました。この25年間、平和文集『ハート・オブ・ピース』の発行をスタートに、「平和かるた」の製作・普及から、昨年「意見ポスター運動」に至る幾多の企画やイベントに取り組んできました。そうしたなかで「核兵器のない世界」を求めて、「核兵器禁止条約」の交渉開始、北東アジアの非核化、ビキニ被曝の再認識、さらには非核自治体の広がりなど新たな展望や問題提起もやってきました。組織体としての刷新と拡大の点でも見るべき成果をあげてきました。いまや「非核の会・京都」もそれなりに市民運動の一翼をになう団体に到達したようです。これは誇りうる25年間だったといっておよいでしょう。

チェルノブイリから25年

しかし他方で、本会創立の1986年はチェルノブイリ原発事故の年でした。なるほど当時から「原発安全神話」への批判の声があげられなかったわけではありません。だが「原発のない日本」という明確な運動目標は、昨年の福島原発事故までは、本会をふくめて、日本の非核平和運動の前面には立ち現われませんでした。ドイツでは、チェルノブイリが脱原発運動の大いなるターニング・ポイントとなったのです。

なぜ「原発のない日本」を掲げられなかったか

そこには、いまにして思えば、いくつかの問題点があったように思われます。たとえば**現代科学技術における非人間的側面**に対する認識の甘さ、核兵器と原発とを「**原子力政策の問題**」として一体的にとらえる視点の欠落、**エコロジー思想の未成熟**など、反省し検討しなければならない課題があるように思います。さらには原発問題が欠落していた根底には、エネルギーの過大な需要を求める**経済成長主義**がありましたが、それに対峙する姿勢も明確ではなかったように思われます。確かに高度経済成長の「負」の側面＝公害への反対と運動は、かなりの広がりを見せ、すくなくない革新自治体を創出しました。しかし、それは経済成長主義そのものに対峙したものではありませんでした。このことが、新自由主義的経済成長の時期まで尾をひいており、脱原発を明確に自覚しえなかった背景にあると思います。

「過去の反省」は未来のために

以上のような問題点をかかえてきたことが、25年前のチェルノブイリ原発事故の発生にもかかわらず、昨年の福島原発事故まで、「原発のない日本」という運動目標を、私たちが掲げられなかったことの背景にあったと思います。「原子カムラ」による「原発安全神話」戦略を非難するだけで終わるわけにはいきません。ただし、過去をふりかえり反省することは、自己目的ではありません。それは、未来に向けて「原発のない日本」の思想と運動を確固たる土台のうえに築き展開するためのものです。